

災害遺族 出合いを力に

福島市の小学校で開かれた津波防災の講演会で、遺族の夫妻が「自分の命を守るのは自分だけだ。大切にしてほしい」と、訴える声が響いた。9月上旬でうだるような暑さが残っていたが、小学5年生の40人はみな、夫妻に目を真っすぐに向けていた。

宮城県大崎市の田村孝行さん(63)と弘美さん(61)夫妻は、同県女川町の銀行支店に勤務していた長男の健太さん(当時25歳)を東日本大震災の津波で失った。上司の指示で2階建ての支店屋上に避難したが、走れば1分の場所に高台があった。上司の意見に背いてでも安全な場所に逃げられなかった理由は何なのか、2人は問い続けている。講演は、孝行さんが経緯を

記者ノート 2023

説明し、弘美さんが健太さんの生い立ちを話すことが多いという。「健太の話をするのが、未来の命を救うはず」。活動を続けて10年以上になり、語った相手は2万人以上に上る。実は、そのうちの一人が私だ。

田村さん夫妻と初めて出会

ったのは7年前の冬で、女川町の支店跡地には冷たい海風が吹きつけていた。記者を指していた当時高1の私は、極端に建物が少ない港町に言葉を失ったことを覚えてい

る。それ以降も夫妻のもとを何度か訪れて「震災を追い続けたい」と思いを膨らませた。

今春、記者になることができ、志願して福島支局に赴任した。

田村さん夫妻は、全国各地の様々な事故や災害の遺族を訪れ、話を聞く活動も行っている。今年8月12日、日航ジャンボ機墜落事故の現場「御巢鷹の尾根」(群馬県上野村)に孝行さんが慰霊登山するの



児童の前で講演する孝行さん(左)と弘美さん(9月5日、福島市で)

に同行した。山道で出会う遺族らには、これまでの活動で見知った顔も多く、孝行さんの顔がほころぶ。「夫妻はこうやって多くの出会いに元気づけられ、逆に元気づけてきたのだろう」と想像した。

夫妻はこうした交流を踏まえ、「出合いは恵みだね」と語る。多くの人との出会いが、活動のエネルギー源になるという。

まだ半年ほどだが、私も多くの人と出合い、悲喜こもごもの話を聞いてきた。恵みの出合いをこれからも大切に、取材へ走りたい。

(新田健)